

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23年 6月 1日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520342

研究課題名 (和文) 台湾原住民族における言語環境の変化および言語転換 (日本語から中国語へ) の実相

研究課題名 (英文) Changes in the Language Environment of Taiwan Indigenous Groups and Facts Concerning the Language Conversion (from Japanese to Chinese)

研究代表者

下村 作次郎 (SHIMOMURA SAKUJIRO)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：20148670

研究成果の概要 (和文) : 本研究は平成 20 年度から 22 年度までの 3 年間、科学研究費補助金基盤研究 (C) の助成を受けた。研究代表者の下村作次郎および研究分担者の魚住悦子は、90 年代より台湾原住民族文学の翻訳・研究に従事し、原住民族作家への聞き取り調査、作品舞台でのフィールドワークを行い、創造される作品世界の理解を深めてきた。さらに研究協力者として、原住民族作家や研究者、雑誌編集者の協力を得て、大きな成果をあげることができた。

研究成果の概要 (英文) : This study received financial grant of academic subsidized based research (C) which spanned three years from 2008 to 2010. Beginning from the 1990's the representative researcher Sakujiro Shimomura and collaborative researcher Etsuko Uozumi were engaged in the translation and research of Taiwan Indigenous literature, the undertaking of interviews with indigenous authors, and the conducting of field work on the literary settings, and the deepening of an understanding of the worlds created through the literature. Furthermore, with the cooperation of indigenous writers and magazine editors, as research collaborators, we were able achieve noteworthy results.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：台湾原住民族、台湾原住民文学、言語環境、言語転換、日本語、北京語、言語危機、原住民族エリート

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、下村作次郎が代表者として行った「台湾原住民文学および言語環境に関する基礎的研究」(平成 17 年度～19 年度、科学研究補助金 (基礎研究 (C)) を継承・発展させるべく取り組んだものである。

初年度 (2008 年度) の 4 月 18 日～19 日には、天理大学において「高一生 (矢多一生) とその時代の台湾原住民族エリート—高一生誕生 100 周年記念国際シンポジウム—」を開催し、研究の継続化をはかった。

(2) 研究代表者は研究分担者の魚住悦子氏や研究協力者孫大川氏らと協力して、2002年11月より『台湾原住民文学選』全9巻(草風館)の刊行を行っており、引きつづき全9巻の完結をはかった。

2. 研究の目的

台湾原住民族が北京語で詩を発表し、小説を書きはじめたのは、台湾で民主化が進んだ80年代に入ってからである。最初は台湾原住民族権利促進会の運動と連動した創作活動であったが、90年代に入ると、台北で運動に従事する原住民族知識人たちのあいだに、原住民族の伝統や文化を自らが知らないことへの反省が生れ、それが「部落へ帰れ」運動につながっていった。その後、こうした運動のなかで自己のアイデンティティの基盤となる部落に帰り、生活をはじめた原住民族の人々のあいだから、自民族の民族誌や伝統文化などを中心に物語を書く新しい原住民文学が生れてきた。

その一方で、原住民族部落では日本語から中国語への言語環境の変化が起こっていた。

本研究は、80年代の台湾原住民文学の誕生から90年代の新しい展開、と同時に原住民族部落で起った言語環境の変化と言語転換の実相を明らかにすることを目的として行った。

3. 研究の方法

基本的にはまず台湾原住民文学の作品を読み込み、そのうえで作品の作者、すなわち原住民族作家への聞き取り調査と作品舞台でのフィールドワークを行い、作家と作品世界を理解する方法を採った。

さらに文学から原住民族世界をみるために、霧社事件はじめ原住民族に関わる様々な事象を知り、理解するために、原住民族作家や文化人、研究者の協力を得て、様々な場所に出かけて聞き取り調査を実施し、フィールドワークを行った。研究の過程で研究の範囲は原住民族からさらに平埔族へと広がった。

なお、フィールドワークは毎年、集中した休暇が取れる9月上旬から中旬にかけて行った。以下、実施したフィールドワークの記録を掲げる。

(1) 2008年9月、埔里を訪ね、本科研海外研究協力者である鄧相揚氏の案内で、埔里に住む平埔族(パゼツへ、カハブ)の部落を歩き、サオ族の自治議会を見学した。また霧社事件の遺族、タクン・ワリス氏やダッキス・パワン氏らにインタビューを行った。

さらに、ルカイ族の作家アオヴィニ・カドゥスガヌ氏の故郷、霧台郷を訪ね、長編小説『野のユリの歌』の作品舞台を歩く。インタビューを行い、また、作品に出てくるルカイの文

化・風習・言語について資料を収集した。この時、プユマ族の作家パタイ氏や山海文化雑誌社の林宜妙氏が同行した。この作品は、2009年4月に草風館より翻訳出版した。

(2) 2009年7月25日、台北国際芸術村で台湾原住民作家筆会が成立したが、その成立大会に出席した。

(3) 2009年9月、霧社事件の遺族タクン・ワリス氏を仁愛郷川中島を訪ね、中原やタクン氏の猟場を案内していただく。八八水害で被災したルカイ族のアオヴィニ・カドゥスガヌ氏を見舞い、一緒に被災地や政府より移村先と指定された場所などを見て回る。プユマ族作家パタイ氏宅を訪問し、インタビューを行う。

(4) 2009年11月にタオ族の海洋作家、シャマン・ラポガン氏を案内して、和歌山県串本町大島須江の漁村を訪ねる。シャマン・ラポガン氏は須江の漁船に乗り、日本の漁師とのイカ釣漁を体験する。また、太地町をたずね、伝統的な鯨漁について意見を交換した。こうした活動も本研究の一環として行った。

(5) 2010年9月中旬、鄧相揚氏の案内で、台中県、南投県、台南県で平埔族(パゼツへ、カハブ、シラヤ各族)の調査を行った。台中県では岸裡文書の調査を行い、あわせて八田技師が設計・建設した烏山頭ダムも見学した。また、15日夜はシラヤ族をテーマとしたバレエ劇「舞濤西拉雅」を鑑賞した。16日はプユマ族の作家パタイ氏をインタビューし、台南市の国立台湾文学館を訪問した。17日・18日は台湾原住民族・平埔族についての資料収集を行った。

(6) 2010年5月末、アイヌ民族のコタンを見てまわる。沙流川上流の平取町二風谷で萱野茂二風谷アイヌ資料館や資料館のそばに建っているチセ(アイヌの家屋)を見学し、さらに平取二風谷アイヌ文化博物館や沙流川歴史館、二風谷ダムを見てまわった。翌日は、苫小牧の西の白老にアイヌ民族博物館と野外施設のポロトコタン(POROTO KOTAN)を訪ね、支笏湖を廻った。ポロトコタンではアイヌの踊りを見たりムックリ(アイヌ口琴)の演奏を聴いたりした。野外の一角では北海道犬とヒグマを間近に見た。鉄の檻のなかにいる巨大なヒグマを見ながら、アイヌ民族と台湾原住民族における熊狩りの意味を考えた。

(7) 訪台の度に、台湾在住の研究協力者、孫大川氏(プユマ族、行政院原住民族委员会主任委員・国立政治大学副教授。代表作『久久酒一次』)、浦忠成氏(ツォウ、考試院委員。

代表作『台湾原住民族文学史大綱』上・下)、鄧相揚氏(国立暨南国際大学人類学研究所兼任助理教授・台湾打里摺文化協会理事、代表作『抗日霧社事件の歴史』等霧社事件三部作)、曾麗蓉氏(国立台湾文学館助理研究員)、林宜妙氏(山海文化雑誌社編集者)、さらにはタオ族の作家、シャマン・ラポガン氏や原住民族音楽の研究者、林清財氏(台東大学教授)たちと会合を持ち、意見交換を行い情報の提供を受けた。

(8) 台湾原住民族図書资讯中心をはじめ公共機関での資料蒐集を行った。

4. 研究成果

(1) 研究代表者および研究分担者は、90年代より台湾原住民文学の翻訳・研究に従事し、原住民族作家への聞き取り調査、作品舞台でのフィールドワークを行い、台湾原住民文学の全体像の理解につとめてきた。その結果、台湾原住民文学の代表的な原住民族作家たちと知り合うことができた。

主な作家には次のような人々がいる。

孫大川(プユマ族)、浦忠成(パスヤ・ポイツォヌ、ツォウ族)、ワリス・ノカン(タイヤル族)、リカラッ・アウー(パイワン族)、シャマン・ラポガン(タオ族)、アオヴィニ・カドゥスガヌ(ルカイ族)、パタイ(プユマ族)、リムイ・アキ(タイヤル族)など

(2) さらに原住民族研究に関わる多くの研究者と知り合い、学術交流を行うことができたようになった。

行政院原住民族委员会主任委員・孫大川氏、考試院委員・浦忠成氏、霧社事件研究者・鄧相揚氏、原住民族音楽研究者・林清財氏、『原教界』総編集・林修澈氏、山海文化雑誌社・林宜妙氏ほか。

(3) 2008年4月18日～19日に、天理大学において「高一生(矢多一生)とその時代の台湾原住民族エリート—高一生生誕100周年記念国際シンポジウム—」を開催した。参加者は100名を超え、評価の高いシンポジウムになった。シンポジウムでは、報告者論文集(全226頁)、国史館館長・張炎憲先生『記念講演 白色テロルと高一生』、『高一生(矢多一生)生誕100周年記念国際シンポジウム 春の佐保姫 高一生記念音楽祭』を出した。

なお、高一生(矢多一生)研究会(Uongu Yatauyongana Study Group)(事務局、天理大学下村研究室)は『高一生(矢多一生)研究』全10号を発行した。

(4) 『台湾原住民文学選』全9巻(2002年～2009年、草風館)の刊行を完結した。

(5) 日本台湾学会第11回大会(2009年6月6日、日本大学)でのシンポジウム「台湾原住民族にとっての霧社事件」の企画開催に協力し、霧社事件で蜂起したセデック族の子孫タクン・ワリス氏の日本での最初の学会参加に尽力した。

(6) 台湾で開催した「台湾研究的国際化与深化—天理台湾学会第20届国際学術紀念大会—」(2010年9月10日-11日、国立台湾大学・中国文化大学)において、「従翻訳来看台湾原住民文学(翻訳で読む台湾原住民文学)」と題する記念講演を行った。

(7) 天理大学中国文化研究会において、台湾原住民族関係の公開研究会を開催することに協力した。

【2009年6月9日】

タクン・ワリス氏
「台湾原住民族にとっての霧社事件」
鄧相揚氏

「霧社事件を描いた現代歌舞」

通訳 魚住悦子

【2010年10月1日】

シャマン・ラポガン氏

「海人と海洋文学」

通訳 魚住悦子

(8) その他、下記の「5. 主な発表論文等」の[学会発表]の項目に記したように、学会、国際シンポジウム、ワークショップで積極的に研究成果を発表することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計17件)

① 下村作次郎、龍瑛宗先生の文学風景—希望と絶望—、(天理大学)中国文化研究、査読無、第27号、2010、27～48頁

② 下村作次郎、「ガヤ」回復への歩み—霧社事件研究の意味を考える—、日本台湾学会会報、査読無、第12号、2010、49-51頁

③ 下村作次郎訳、ダッキス・パワン(Dakis Pawan, 郭明正)著、Kari Alang Nu Gluban(清流部落簡史)、日本台湾学会会報、査読無、第12号、2010、53～64頁

④ 下村作次郎訳、邱貴芬著、台湾原住民文学の境界交差創作の研究手法について—シャマン・ラポガンの散文創作を例として—、(天理大学)中国文化研究、査読無、第26号、2010、9-45頁

⑤ 下村作次郎、台湾研究、この10年、これからの10年 関西地域における台湾研究、日本台湾学会会報、査読無、第11号、2009、11～26頁

- ⑥下村作次郎、「消音」の危機は去ったのか—台湾原住民文学の観点から—、現代台湾研究、査読無、第35号、2009、112-119頁
- ⑦下村作次郎訳、高英傑著、ケユパナの思い出(七)(八)、高一生(矢多一生)研究、査読無、第9・10合併8号、2008、1~9頁
- ⑧下村作次郎訳、高英傑著、土地、民族、愛情—高一生の歌と手紙—(下)、高一生(矢多一生)研究、査読無、第9・10合併8号、2008、105~113頁
- ⑨魚住悦子訳、鄧相揚著、セデックの歌—風の中の緋桜、(天理大学)中国文化研究、査読無、第26号、2010、101~109頁
- ⑩魚住悦子訳、Takun Walis(邱建堂)著、ガヤと霧社事件、日本台湾学会報、査読無、第12号、2010、7~19頁
- ⑪魚住悦子訳、Takun Walis(邱建堂)著、口述歴史、日本台湾学会報、査読無、第12号、2010、65~74頁
- ⑫魚住悦子訳、鄧相揚著、日本統治時代の霧社群(タックダヤ)の部落の変遷、天理台湾学報、査読無、17号、2008、19~41頁
- ⑬魚住悦子訳、鄧相揚著、ガヤと義理—花岡一郎、花岡二郎のエスニックアイデンティティ—、高一生(矢多一生)研究、査読無、第9・10合併号、2008、24~38頁
- ⑭魚住悦子訳、孫大川著、バリワクス—プユマ族の音楽の魂 陸森宝—(2)、高一生(矢多一生)研究、査読無、第9・10合併号、2008、71~88頁
- ⑮魚住悦子訳、孫大川著、バリワクス—プユマ族の音楽の魂 陸森宝—(1)、高一生(矢多一生)研究、査読無、第8号、2008、29~32頁
- ⑯魚住悦子、バリワクス 時をこえて吹く風、高一生(矢多一生)研究、査読無、第8号、2008、17~28頁

[学会発表](計9件)

- ①下村作次郎、龍瑛宗先生の百年冥誕紀念專題演講「龍瑛宗先生の文学風景—希望與絶望—」、国際シンポジウム「戦鼓声中の歌声：龍瑛宗及其同時代東亜作家国際學術研討会」、2010年9月24日、国立清華大学
- ②下村作次郎、從翻譯来看台湾原住民文学(翻譯で読む台湾原住民文学)、第20回天理台湾学会、2010年9月10日、国立台湾大学
- ③下村作次郎、從翻譯探討台灣原住民族文學中的女性形象—原住民族女性能否被「看得見」—、ワークショップ・跨國研究脈絡下的台灣文學：性別、國族與跨文化流動、2010年8月24日~25日、国立中興大学
- ④下村作次郎(パネリスト)、台湾原住民族にとっての霧社事件、第11回日本台湾学会、2009年6月6日、日本大学文理学部
- ⑤下村作次郎、「消音」の危機は去ったのか—台湾原住民文学の観点から—、第12回現代台湾学術討論会、2008年9月7日、関西大学

代台湾学術討論会、2008年9月7日、関西大学

- ⑥下村作次郎、関西地域における台湾研究、第10回日本台湾学会、2008年5月31日、東京大学
- ⑦魚住悦子、臺灣原住民族文學在日本的翻譯狀況與未來、99年臺灣原住民族文學論壇、2010年10月29日、台湾大学
- ⑧魚住悦子、台湾原住民族文学史・長編小説の誕生—『城外夢痕』から『笛鶴 大巴六九部落之大正年間』へ—、第20回天理台湾学会、2010年9月11日、中国文化大学
- ⑨魚住悦子、台湾原住民族エリートに関する初歩的考察—ロシン・ワタン、花岡一郎二郎、高一生、バリワクスから—、第18回天理台湾学会、2008年6月28日、天理大学

[図書](計4件)

- ①魚住悦子訳、新潮社、「神様の若い天使」、『天国の風—アジア短編ベスト・セレクション—』2011年、83~106頁
- ②魚住悦子・下村作次郎共編、草風館、台湾原住民族選7 海人・獵人、2009年、全303頁
- ③下村作次郎編、草風館、台湾原住民族選6 晴乞い祭り、2008年、全413頁
- ④魚住悦子、人文書院、リカラッ・アウーとその作品に描かれた台湾原住民族女性、台湾女性史入門、2008、237~239頁

[その他]

- ①下村作次郎、《台湾原住民文学選》日本語訳本的意義、原教界、36号、2010年12月、24~26頁
- ②下村作次郎、『台湾原住民文学選』(全九巻)完結に寄せて 世界少数先住民族文学のなかでも注目すべき作品の集成、図書新聞、第2939号、2009年10月31日、3頁
- ③下村作次郎、台湾原住民族の世界を知る『台湾原住民文学選』全9巻の完結、アジアンあい、No.80、2009年8月10日、16頁
- ④下村作次郎、アイヌ文学からのまなざし—内川千裕さんにとっての台湾原住民文学—、台湾原住民族との交流会 News、31号、2009年3月14日、4~6頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下村 作次郎 (SHIMOMURA SAKUJIRO)
天理大学・国際学部・教授
研究者番号：20148670

(2) 研究分担者

魚住 悦子 (UOZUMI ETSUKO)
天理大学・国際学部・講師
研究者番号：20465686